

安らかに眠れ



“R. I. P.”

(1877)

南フランスのピレネー山脈⁽¹⁾のふもとに太古の昔から一風変わった小さな市場町があった。そこでは年月とともに住民たちの生と死が繰り返されている。しかし、老人が若い頃の話で孫たちを楽しませたくても、彼の記憶するかぎり具体的に示すことのできるような変化が町では何世代も起こっていないかった。曲がりくねった狭い通りに並んだオンボロの家々は互いに前のめりになって、まるで時間つぶしでもするかのように、何年も前に見たことについて噂話をヒソヒソとやっているように見える。住民たちでさえ自分の住まいの特徴である古めかしさに気づかぬうちに同化してしまい、のんびりした夢心地の状態——自分が生きている進歩的な時代の精神とはまったく相容れない状態で——毎日を過ごしていた。

荷馬車が通る音もめったに聞こえない道——古い敷石の割れ目に雑草がはびこっている道路——を歩いていると、いきなり中世の時代⁽²⁾に連れ戻されたような、そんな錯覚に襲われる。突然、ラブレ⁽³⁾の物語に出てくる修道士たちやフロアサル⁽⁴⁾の年代記に登場する騎士たちに出くわしたとしても、なんら不思議ではない。そうした人たちがいても、周囲の雰囲気と完全に調和してしまうからである。こういった田舎町の素朴な人々の生活は、あくせくした外の世界の生活と大いに異なっている。もよりの町でさえ連絡をとる手段がほとんどないのだが、今から語られることになる事件が実際に起こった五十年前は、言うまでもなく、もっとひどい状態であった。

夏と冬、種まき時と収穫期、それぞれが順番にやって来ては去って行ったが、いつも住民た

ちの頭は土地を耕す男や牛飼いや羊飼いにありがちな、尽きることのない心配事ではいっばいだった。従つて、ジャック・シューテット⁽⁵⁾が営む宿屋の酒場に毎晩のように集まる連中も、穀物の値段や家畜の病気を除いては、自分が偉そうに発言できる新しい話題を持ち合わせていなかった。だが、ちょうどその当時、突然、よどんだ水たまりのような田舎者たちの知識欲を根底からかき立て、長きにわたつて尽きることのない情報源を提供することになる事件が発生した。

それは南部地方に特有の天気がいよいよ夏の日の夕方の遅い時刻——西の空に日没後の夕陽の光がまだ残っている時刻——の出来事であった。あちこちの窓に明かりがきらめき始め、たいいていの者たちは自宅でくつろぎ、家事の後始末をしたり、そろそろ寝ようかと考えていた。しかし、ジャック・シューテットの宿屋の前にあるベンチでは、客がまだ何人か帰らずに残つており、喉の渇きをいやしきれていない者たちや、会話を盛り上げてくれそうな事件でも起こらぬものかと、かすかな望みを抱いている者たちがいた。ところが、今晚は、後者の男たちが失望の憂き目にあうことはなかった。というのも、ほとんどの客が仕方なく腰を上げ、お休みの挨拶を交わそうとしていた、まさにそのときガタガタと走ってくる馬車の車輪の異様な音が、通りの端から聞こえてきたからである。その音は次第に近づき、客たちがびっくりして、亭主が大喜びしたことに、一台の馬車——明らかに貸馬車だった——が宿屋の正面で停まった。

「亭主はいるかい？」と馬車の御者が叫んで言った。

「ああ、何の用だね？」と、亭主のジャックは馬車の扉へ走り寄って返事をした。

「ご婦人が今晚お部屋をご所望だ。満足いただけるようにな！」

それから御者は運転席から降りながら言った。「オレも今晚はここに泊まるぜ。馬を小屋に入れて面倒をみてやってくれ。明日の朝は四時に出発するんで、馬具をつけて何もかも準備しとくように馬番に伝えてくれよな。朝食までにD——町に戻らにやならんのだから」

御者が言ったのは十マイル離れた小さな町のことだった。

「で、ご婦人は？ 一緒に戻りなさんで？」

「いいえ」という声が馬車の中から聞こえた。「少しの間ここに逗留します」

お出ましぶりから判断して、間違いなく上客だと踏んで大喜びしたジャックが馬車の扉を開けると、長くて黒い外套にすっぽり身を包み、顔をベールでおおった背の高い女性がサッと降り立った。

「手前どものおもてなしに必ずや満足いただけましょう」と、ジャックは宿屋の亭主らしく自信たっぷりに答えた。そして、ご婦人を宿屋の二階へ案内し、こぎれいな小さい部屋に通した。

「さぞかし空腹を覚えておいででしょうな」とジャックは言って、二本のローソクに火をともしながら、ご婦人の顔をチラッと見ようとしたが、それはできなかった。「ほんの数分でお食事の準備はできますよ」

「ありがとうございます。でも何もいりません」というのが彼女の返事だった。「御者には必要なことを全部してやりなさい。私はすぐ床に就きますから、もう下がりなさい」

ジャックはもつと話をしたり、上客の顔を見るために、その場にもつと留まりたかったのだが、彼女の口調がそうした機会を与えてくれなかった。彼女の話し方は命令することに慣れた人の話し方だったのである。それで宿屋の亭主は低くお辞儀してから退室した。

ジャックが一階の酒場へ降りてくると、そこでは大興奮が渦巻いていた。馬車の到着を目にした町の連中が大拏してやって来ていただけでなく、けたたましい車輪の音にびっくりした隣人たちも大勢そこに来ていたからである。みんな御者を取り巻くようにして集まり、この新たな来客について様々な質問を一齐に投げかけていた。ジャックが降りてきたとき、ちょうど御者が少し怒ったような口調で質問に対する最終的な答弁を行っているところだった。

「だから、もう一度お前らに言うけど、ご婦人のことは何も知らんのだから、いろいろオレに質問したってムダってもんだ。あの方は他の旅行者と同じようにD——町の青鐘亭^{クローシヤプルー}まで大型の馬車でいらして、隣町まで行く馬車をお求めになったってわけよ。自分でおっしゃってるように、しばらくここに滞在されるってんなら、お前らも好奇心を満たすチャンスがあるうってもんじやないか」

ちやうどその瞬間にジャックが酒場に入ってきた。彼は集まっている人間の多さに気づくと偉そうな態度をとった。

「これこれ、みな衆、そんな男のことはほっときな。ご婦人がオレの宿屋にいらっしやり、オレが自分で話をして注文を承っただけで十分じゃねえか。今はお前らと話をする時間はねえし、大つぴらにオレのお客さんについて根掘り葉掘り尋ねるなんざ、身分不相応つてなもんだぞ」

それから御者に向かつて、「あんたの食事は二、三分で準備が整いますぞ。部屋に案内させてもらいましょ」と言った。

それで、みんなの根も葉もない話がまたぞろ自由に飛び交い、宿屋の亭主の威厳ある叱責など、どこ吹く風と聞き流されてしまった。この話題によつて最終的に、あんぐりと口を開けて驚く者、おずおずと自分の考えを口にする者、独断的な主張をする者といった具合に、集まった連中は性格に従つてそれぞれ色分けされた。いろんなことが当てずっぽうで言われ、村一番の物知りでさえ自分が知っている中で一番有名なフランス貴族の名前を何のためらいもなく言う始末だった。疑い深い連中は笑い飛ばしてから、あの謎めいた客はどこか裕福な農場主の娘で、ちよつと気まぐれに田舎を見たくなくなったにすぎないと思つていような素振りを見せ、この謎めいた問題も朝になれば夜霧のように消え去るはずだと言い張つた。

議論は遅い時刻まで続いたが、ジャック自身は客たちに近寄ろうとしなかった。せきたてられて実は何も知らないことがばれるのを恐れていたに違いない。とうとう、何も分からないという事実を除いて、議論からは何の結論も引き出せないことが判明したので、噂話も一つずつ

消え始め、真夜中になる頃には酒場も明かりが消えて静かになった。

翌朝は日の出の直後に、通りに沿った住人たちはゴツゴツした敷石の上を通過してD——町へ戻る馬車のガタガタという音で目がさめた。昨晩の議論を蒸し返すのに何か必要だったとしたら、これこそその機会を与えるものだった。宿屋の亭主ジャックが姿を現して、朝のパイプをくゆらせながら、開いたばかりの酒場の前を歩きだすと、たちまち取り囲まれて質問攻めにあつた。

ジャックが依然として口を閉じたまま、もったいぶった態度をとり続けていたため、町の者たちも推測によつてしか、好奇心という内なる欲求を満たすことができなかつた。「あれが謎の客のいる部屋だぞ！」と、ジャックが二階の窓を指さしたので、みんなの好奇の目がそちらに向けられた。だが、どんなに詳しく調べてみても、何一つ変わったところは見られない。明らかに、こうした場合になし得る唯一のことは、時が経過して貴婦人みずからによつて謎が解き明かされるまで待つということであつた。ところが、貴婦人は一向に起きてくる気配がない。太陽が昇つて、ずいぶんしてからジャックは自分の娘をやつて部屋扉をノックさせ、朝食をとられる気があるのかどうか尋ねさせたが、娘は何の返事ももらえなかつた。こんなに長く寝られるとは長旅で疲れておられるからだ——ジャックはそう考えて自分を慰めた。しかし、とうとう正午近くになった。彼は娘に再びノックさせたが、またも反応がない。どうすることもできないではないか。午後になつたので、ジャックは隣人たちを相談のために呼び集めようと

考えた。全員の一致した考えは、無理にでも部屋に入ってみるのが宿屋の亭主としての務めだというものだった。ジャック・シューテットは宿屋の亭主といえども普通の人間にすぎなかった。みなと同じ好奇心に駆り立てられ、その決定を受け容れた。ジャックは決定に従って扉をこじ開け、選ばれた多くの友だちと一緒に部屋の中へ入って行った。

目の前の光景を見て、みんな驚きのあまり二歩、三歩と後ろへたじろいだ。ベッドの外側には豪華な結婚衣裳のようなものを着た女性が倒れているではないか。両手首には高価な宝石をちりばめたブレスレットがはめられ、ネックレスもまたすべて宝石でできているように見えた。彼女はシンプルだが高価そうな作りの頭飾り^(ヘッドドレス)を身につけ、その頭の上には顔からはね上げられた優美な織物のベールがかぶさっていた。この光景は遠くから見てもまばゆいばかりだったので、部屋に入った者たちは驚きで言葉を失い、じつと突っ立つことしかできなかつた。しばらくして、みんなで近づいて彼女の顔を眺めたが、ものすごい美しさだった。だが、両方の頬には血の気が残っておらず、わずかに開いた唇は微動だにせず、広い額は大理石のように白く、冷たかった。死んでいたのである。どうやって死んだのかについてはすぐ明らかになった。毒⁽⁷⁾が入っていると分かる小さなビンが右手で強く握られていたからだ。発見者たちは互いに顔を見合わせた。その顔は亡骸^(なきがら)と同じように真っ青になっていた。最初に沈黙を破ったのはジャックだった。

「みなの人衆、これは一体どういうことだ？」

みんな黙ったまま首を横に振った。馬鹿げた話などしている場合ではない。ほとんど間髪を入れず全員が部屋を調べてみることを思いついた。引出し付きの書き物机の上には、金貨の詰まった大きな財布が、さらに横には鉛筆で書かれたメモがあった。

「みなさん、これをお読みになる時には、私はもう存在していませんでしょう。私の素性を知らうとなさらないでください。私の過去を知っても気がふさぐだけです。みなさんにお願いたしいのは、このままの姿で私を埋葬していただくことです。お財布の中にお金が入っていますから、それでお葬式の代金を払ってください。みなさんに幸せが訪れるように、残りのお金はすべて差し上げます」

それから二日後、この小さな町では前代未聞の大きな葬式が執り行われた。「お嬢さま——この見知らぬ女性はその呼ばれていた——の埋葬式への出席をみんなが望んでいた。うるわしき貴婦人の非業の死に対して、純情な人々の目に涙が止めどなくあふれた。彼女の埋葬地では四つの支柱の上に飾り気のない墓石が置かれ、その墓石には十字架と例の「R・I・P」⁽⁸⁾という文字が刻まれていた。

* * * * *

謎の「お嬢さま」が埋葬された日から十二年が経過した。埋葬される前の十二年と同様に、それは村の外観にほとんど何の変化ももたらすことのない時の経過であった。少ないながらも変化があつたとすれば、それは主に老朽という名の変化である。より目に見える形で変化が現れたのはもちろん住民たちであつた。多くの人が亡くなり、多くの人が生まれ、当時は子供だつた者たちも今では大人になつていたが、新しい世代といつても本質的には古い世代と変わりはなく、信じることも信じないことも昔と同じ、風俗習慣も日々の話題も昔と大差がなかつた。尋常ならざる事件などめつたにない平穏な地域社会では、そうした事件がたまたま起ると、当然のことだが、その鮮明な記憶が長く保たれるものである。人々が最終的に好奇心を満たされて飽きてしまい、事件そのものの新奇な魅力がなくなつてもなお、それは先祖伝来の家宝のように受け継がれる話となる。かの麗人の謎めいた話の場合もまたしかり。ずいぶん昔のことになるが、村の物知り連中が独創的なアイデアを駆使し、この謎を解こうとしたが駄目だつた。今でも、その謎は何でも不思議がる子供たちに語つて聞かせるには又とない話であり、我らがジャック・シューテットのようにな、実際に「お嬢さま」を見たことがある人たちにとつては、いつでも大きな顔をして、もつたいぶつて話ができる情報源となつてゐる。

「お嬢さま」の小さな埋葬地には、生えたばかりの草が青々と茂つていて、古い樹木⁽⁹⁾の横に張り出した枝の葉が涼しそうな心地よい木陰を作つてゐる。墓石が一番まばらな埋葬地の隅つこでは、大勢の子供たちが騒々しく遊びながら、長い夏の日の午後を過ごしてゐた。子供た

ちからそう遠く離れてはいなかったが、外の道路に通じている教会墓地の木製の門の両脇には低い石が置かれていて、その一つに若い女性が座っていた。ひざの上の何か縫い物に顔を向けていたかと思うと、次の瞬間には両手を下し、嬉しそうな顔で子供たちの群れをじっと見ていた。彼女は宿屋の亭主ジャックの娘である。今では結婚して子供も生まれていた。彼女は死体で発見された貴婦人の部屋の扉をノックしに父から二階へやられた朝のことを今でもよく憶えていて、その時の恐怖について子供たちに話して聞かせるのが好きだった。子供たちは彼女のことをナネットと呼んでいたが、彼女を囲んでおしゃべりするために、いつも喜んで近所の家々からやって来ていた。

遊びに夢中の子供たちに囲まれて草の上に座っているのがナネットの娘で、まだ三歳にもなっていない。母親は急に縫い物を脇に置くと、騒がしい群れの中の一人に向って叫んだ。

「アイザ、娘を抱っこして私の所につれて来てちょうだい！ 怪我をしちゃいそうだから」
アイザは言われたとおり幼子を両腕で抱きかかえて運び、お母さんのひざの上に座らせた。彼女がその子を愛撫してから遊び仲間の方へ戻ろうとした、ちょうどそのとき小さな門が開いて、一人の男が教会墓地に入ってきた。背が高くて、しゃきつとした人物で、顔以外に年をとっていると思わせるようなところは全然なかった。しかし、顔はシワだらけで、やつれていて、短いあごひげには白い毛がぎっしりと交じっていた。

この男は不安げな疲れた表情を目に漂わせ、落ち着かない様子で周囲を見ていた。背中には

小さな合切袋^{ウオレット}⁽¹⁰⁾を担ぎ、手には杖を持っていたが、それは体を支えるためのものとは思えなかった。ナネットとイライザは男が教会墓地を横切っている小道に沿って歩くのを見ていたが、彼は二人のすぐ近くまで来ると、草むらの方へ向きを変え、四つの石柱に支えられた大きな平たい墓石に疲れたように腰を下ろした。それから、合切袋を降ろして開けると、中からパンを取り出して食べ始めた。この墓石を座席として選んだのは、多分きれいだっただからであろう。周囲の墓石はどれも草の葉におおわれるか、雑草が生い茂っていたのである。一方、彼が選んだ墓石は見るからに古そうだったが、誰かの手によって十分な世話がなされ、きちんと清掃されていた。

男がパンを食べ始めると、すぐ子供たちが彼のこと気づき、遊ぶのを突然やめて、急いでナネットの所に走ってきた。

「ナネット、ナネット！」と、子供たちはみんな一緒に大声で言った。「見て！あの老人、お嬢さまの墓石に座ってるよ。あっちへ行ってくれて、言った方がいいんじゃない？あそこは誰も座っちゃいけないんだから」

ナネットはしばらく迷っているように見えた。

「まあ、みんな」と、彼女はしばらくして答えた。「そういう失礼なこと、言っちゃダメよ。でも、イライザ、あの方の所に行つて、その墓石には座つてほしくないって、みんなが思つてることを伝えてくれないかしら？」

イライザは命令を実行しに走って行った。そして男の前に立ち、やや震えるような声でナネットの言葉をそのまま伝えた。最初は悲しげな目で見つめられて怖かったが、彼女が話し終わった時には彼の口もとに笑みがこぼれていたのです、その恐怖もたちまち消え去った。

「で、どうしてまた誰にもここに座ってほしくないのかね、お嬢ちゃん？」と男は尋ねたが、イライザは黙っていた。彼は墓石から立ち上がると、そこに刻まれている碑文を探したが、十字架と「R・I・P」という文字しか見えなかった。「ここには誰が埋葬されているのかな？」イライザは答えたくないみたいだった。「長い話になるわよ」と、彼女はしばらくしてから答えた。「ナネットの所へ来てちょうだい。すべて知ってるから話してくれるわ」

こう言われて、見知らぬ男は好奇心を幾分そそられたように見えた。彼は食べ物を含切袋に戻し、子供のあとに続いてナネットの所へ行った。若い母親は彼が近づいてくるのを目にする、ほんの少し顔を赤らめ、彼が目の前に来てお辞儀をしたので、それに応じるべく立ち上がった。男はイライザの巻き毛の茶髪に手を置いて話しかけてきた。

「この子の話では、私が座ってた墓石には、それにまつわる話があるそうだね。迷惑でなければ、話してくれないかい？」

見知らぬ男の声が朗々として音量も豊かだったので、ナネットはその語調に驚いて顔を上げた。その素晴らしい声の質は彼の風采と不思議なコントラストをなしているように思えた。

彼女は慎み深く答えた。「喜んでお話ししましょう。この辺りでは見慣れぬ方のようにす

が、村の者なら皆よく知ってる話なんです」

男は何も言わずにうなずき、ナネットの向かい側にあつた墓石に腰を下ろした。すぐに彼女は前に語られたことを同じように話しだした。聞き手も初めのうちは普通の好奇心しか示さなかつたが、話が進むにつれて不安を覚え始めたようである。ちよどナネットが貴婦人の豪華絢爛たるドレスの説明をしていた時のことだつたが、彼は急に立ち上がつて苦痛の叫び声をあげた。びっくりして相手の顔をじつと見つめていたナネットは、その顔が死人のように真つ青になつているのに気づいた。男はほとんど立つておれないような感じで、しばらく躊躇ちゆうちゆうしていたかと思うと、また墓石に座つた。

「ご加減でも悪いんでしょうか？」と、ナネットがあわてて尋ねた。

彼は質問を聞いているようには見えず、両手で顔をおおつたまま座つていたが、すぐさま低い悲しげな声が口から漏れ出た。周りに集まつていた子供たちは怯おびえたように互いに顔を見合わせ、物問いたげにナネットを見たが、誰ひとり口をきく子はいなかつた。すると、突然、見知らぬ男はあわただしく墓石から立ち上がり、まるで眠りから覚めたばかりであるかのように不思議な、うつろな目つきで辺りを見回した。それから不意にナネットの方を向いて話しかけたが、何を言っているのか全然理解できないほど取り乱している様子であつた。

「その宿屋はどこ？ どこかね？ 宿屋の亭主はまだ生きてるのかい？」

「ジャック・シューテットはまだ生きてますよ」と答えたナネットの声も、驚きと不安とで

震えていた。「私はその娘です」

彼は返答の後半部分に注意を払わず、彼女の近くまで行って腕を強くつかんだので、彼女は叫び声を上げずにおれなかった。それで彼はしゃがれた声で「そこに案内してくれないかね？」とささやいた。ナネットは言われたとおりにし、宿屋に向かつて足早に歩き始めた。子供たちも二人のあとに続き、おそろおそろ見知らぬ男の顔を見上げたり、ひとつ走りして彼女の援助のために誰か連れてこようかといったような、訴えかけるような表情でナネットの顔を見たりした。

みんなが宿屋に到着すると、ジャック老人はいつもの場所にいた。扉の前のベンチに座って煙草をくゆらせていたのだが、最初は娘が宿屋に客を連れてきたと思ひ、一行を迎えるために嬉しそうに立ち上がった。

「父さん、この方が話をしたいそうよ」とナネットは言った。そして、群がる子供たちの方を振り返り、みんなをまた遊びに戻し、彼女自身は苦しい状況から救い出されたかのように、幼児を連れて自分の家の方に向かった。

「内々で話ができるかね？」と見知らぬ男が言った。

ジャックは「いいですとも」と答え、向きを変えて家の中へ入ったが、その態度には自分自身の威厳だけでなく相手を意識した清廉さも表れていた。

二人は酒場の小さな特別室で一緒に腰を下ろした。見知らぬ男はジャックが申し出た軽い飲

食物を固辞し、先ほど少し耳にした話をすぐまた持ち出し、その話が本当かどうか尋ねた。宿屋の亭主は見るからに興奮している客に驚いたものの、得意になって話せる機会が訪れたことを喜び、もったいぶった態度で例の謎めいた事件の顛末を詳しく説明してやった。

「で、これは十二年前のことなんだね？」と男は尋ねた。

「ぴったり十二年前のことです。あん時はナネットもまだ八歳の小娘じゃったが、今じゃもう二十歳ですぜ」

「で、服をすべて着せたままで埋葬したんだね？ お墓をあばいてもらわんといかんな」

ジャックは驚きで口をぼかんと開けたまま、男の顔を穴の開くほど見つめていた。ぶっ魂消るようなことを聞いて、彼は畏敬の念を抱いたほどである。二人はしばらく黙ったまま互いに向き合っていたが、やがて見知らぬ男が「彼女のものは何も保管してないのかい？」と熱心に尋ねてきた。

男のこのような態度に抵抗できず、ジャックはしばし考えてから答えた。「ええ、一つあります——ですが、あの方をしのぶ縁にするためだけでして、値打ちがあるからじゃねえんで。両手には指輪が二つ付いてましてね。あつしらが一ついただけやした」

「私に見せろ」と男が出し抜けに言ったので、その奇妙な言動にジャック老人は面食らってしまった、相手の命令口調に腹を立てることさえ思いつかなかった。ジャックは完全に当惑した面持ちで部屋を出て行き、すぐさま小さな指輪を持って戻ってきた。指輪にはシンプルな寶石

が埋め込まれており、繊細な^{モノグラム}図案文字⁽¹¹⁾が何か刻まれていた。すると、男は指輪を持ったまま、突如として両手で顔をおおって泣きだした。

ジャックの困惑ふりは今やピークに達した。自分がパイプを落としたことにハツとして気づくまでに数分かかったほどだ。このちよつとした出来事でジャックは理性を取り戻した。その出来事が彼の注意を見知らぬ男からそらし、高ぶっていた神経を和らげる結果となったのである。彼は体を曲げるのに苦勞しつつ——年を取るとともに腹の脂肪も増えていたのだ——壊れたパイプを憂い顔で拾い上げ、バラバラになった宝物のパイプを名残惜しそうに見ていた。そして、彼が見るのをやめた頃には、見知らぬ男も話ができるくらいには気を静めていた。

「私の奇妙な言動にさぞかし驚いただろうね」と、彼は悲しげな低い声で言った。「君には説明をしなきゃならんな。もし聞いてくれる時間があるなら、すぐに謎を解いて、君の心を軽くしてやるよ」

ジャックは時間を取られる緊急のこともなかつたので、いくら解こうとしても絶対に解けなかつた謎が、これから氷解するのかと思うと嬉しかった。彼はベンチに座り、相手にも腰かけるように指さして待っていたが、この時までには好奇心を丸出しにして自分の威厳を損なうことがないように細心の注意を払うようになっていた。見知らぬ男はしばらく黙したのち話し始めた。

* * * * *

私の名前は言わないでおこう。その必要もないし、語らずにいた方が多分よからう。私の出自は由緒あるフランス貴族で、その貴族の称号を父の死によって受け継ぎ、この町から五十マイルほど離れた所にある大きな地所も手に入れたとだけ言えば十分だ。父が亡くなると、私にとって肉親は弟だけとなったが、この弟はプライドの高い横柄な野心家で、私とは正反対の性格だった。父は私に早く結婚してほしいとよく言っていたけど、私は研究に没頭していたから、妻や子供を持つことで余計な責任や心配を我が身に招きたくないと思っていたんだ。父の家名を継承したとき、私はすでに三十に近かった。ずっと学問に励み、世間からほとんど完全に隔離された生活をしていたので、独身のまま跡継ぎもなく死んでしまい、称号も地所も弟に残す可能性が、つまり弟を大喜びさせる可能性が十分にあつたから、突如として私が妻をめとるつもりだと言いだした時の弟の怒りようときたら、それはもう大変だった。

自分でも予期せぬことに、そんな尋常ならざる決意をする気になつたのは、次のような事情のためだった。よく私は地所を取り囲んでいる森林で長い時間ひとり散策をしたものだ。時にはのんきに自然を楽しんだり、時には自分の考えに昼の間ずっと没頭したり、夜は夜でどこかの宿屋——それが無い場合は、お金を払えば喜んで夜露をしのがせてくれる小作人の住まい——くらい見つけるだろうと思って、何日も家を空けたものだった。

ある日のこと、たまたま私はいつもより遠くまで歩き回り、日没になったので一晩泊まる場所はないものかと探し始めたのだが、自分がどこにいるのか皆目わからなくなっていた。とはいえ、これは大した問題じゃなかった。歩き続けていると、ほどなく道端に建っている——他の住まいからは少し距離がある——小さな田舎家にたどり着いたからだ。ちょうど太陽が沈んだところだったので、その晩はこの田舎家に泊めてもらえるだろうと思ひ、私は中へ入ってみた。遠慮せずに入ったのだが、部屋にいたのが夕飯の準備に精を出している若い娘ひとりだけだったから、少し気まずい思いをしたよ。彼女はとても質素な服装で、それはどちらかと言えば普通の小作人の娘の服よりも粗末だった。私の足音に気づいて振り返った彼女の顔は、それはもう美しく、あれほど美しい顔は見たことがないね。

「お父さんなの？」と、彼女は振り向きながら言ったけど、目の前に見知らぬ男がいたので、すぐさま最高に魅力的な笑みを浮かべて、自分の勘違いを謝ってくれた。といつても、田舎者のぎこちなさやきまり悪さは微塵も感じられなかったけどね。

「失礼しました。お父さんの帰りを待つてたので、その足音かと思つたんです。お父さんに何か御用でしょうか？」

私は彼女に迷惑をかけることになった理由を説明し、父親が帰つてくるまで家の中で待つてもよいかと尋ねた。すぐに許可してくれたので私は腰を下ろし、彼女はそのまま夕飯の準備を続けてくれたよ。部屋をあちこち動きながら、何か火にかけて料理をせつせとしている彼女の

姿に、私は目を奪われてしまったね。彼女の一举手一投足はそれはもう優美そのもので、時おり彼女から言葉をかけられると、私は自分が小作人の台所というより伯爵夫人の客間にいるような気がした。要するに、すっかり心を奪われてしまい、どんなに魅力的な女性に対しても絶対に動かされな**い**と思つていた自分の心が、一瞬のうちに、今まで経験したことのない恋がける気持ちでいっぱいになったのさ。

「愛するのにふさわしい女性をやつと見つけたぞ」と私は心の中で思つたよ。それで、彼女の前に姿を現してから十五分もしないうちに、もし彼女が望むなら、私は妻にしようとして心を決めたんだ。君はこれが理解できないほど非現実的な決心で、私のような地位にある人間にとつては思慮のない決心と思うだろうが、ちゃんと私という人間を理解してくれないといけないよ。私は同じ階級の者たちが強く執着している生活上のしき、たりには反感を抱いていて、そうした自分をむしろ誇りに思つていたんだから。それに、私は楽天的な性格なので、何事にも縛られずに判断して行動する自分に対し、いつも最高の結果を期待していたのだからね。

ほどなく父親が帰ってきた。屈強な体つきで親切そうな顔をした愛想のよい男で、すぐ分かつたことだけど、普通の小作人には見られないほどの知性を備えていたよ。私を心から歓迎してくれ、相手が行き暮れた旅人だと分かるとすぐに、ためらうことなく夕食と一晩のベッドを提供してくれた。また、私が宿泊代を払おうとすると、自分は宿屋をやっているわけじゃないと答えて固辞したが、そこには誇りのようなものが感じとれたね。私は一日中ずつと歩き通し

だったので疲れてたけど、新しい友だちのもてなしに何の不足もなかったし、実際とても楽しかった。この親子と一緒にいただけのなら、どんな粗末な食事でも、美味しいと思っただろう。この小作人の娘は——名前はメアリアンだと分かったが——食事中は私の向かい側に座っていたから、その美しい顔から目をそらすのは無理なことだった。一度だけ彼女は私の視線に気づいたみたいで、私と目が合うと、ほんの少しだが頬にパツと赤味がさしたよ。みんなで楽しく会話しながら夕べを過ごし、私は退室したくなかったんだが、小作人は簡素な生活習慣のためか早めに腰を上げ、私を寝室に案内してくれた。

翌朝は早く起き、私は彼らと一緒に同じ一つの料理を食べてから、出立の意志を伝えた。前の晩にほめかされていた警告もあって、あえて宿泊の支払いを父親に申し出ることはしなかったが、この道を次に通る時は——心ひそかに思ったように、すぐそうするつもりだったんだけど——喜んで旧交を温めることにすると彼らに確約した。この二人の友だちには自分の名前をすでに教えていたので、彼らは私との会話できまり悪さを感じることもなく、いつでも私を大歓迎すると言ってくれたよ。

それから二週間もしないうちに私は彼らを再訪し、心から歓迎してもらった。だから、メアリアンに対しても父親に対しても、気にかけていた話題にはあえて触れず、すでに私たちの間に芽生えていた友情と親交を深めることだけに力を注いだんだ。そのあと私は数ヶ月にわたって小さな田舎家をたびたび訪れた。そうして、ある日とうとうメアリアンと二人だけになっ

たとき、自分が頻繁にやって来ていた理由を思い切って告白したんだ。彼女もすでに気づいていたらしく、ためらうことなく——まったく謙虚にはあつたけど——私が完全に彼女の心を射止めてしまったことを認めてくれたよ。これを聞いて私の喜びが頂点に達したことは言うまでもない。それで、私は二人の間に起こったことを父親に直ちに告げ、娘さんと結婚させてくださいと頼むつもりだとメアリアンに言ったんだ。そして、仕事から帰ってくる途中の父親を迎えに行き、この問題をすぐ彼に持ち出したのさ。彼は最初とても驚いた様子だった。私は自分の名前と階級を言えば、それだけ簡単に同意を得ることができると思っていたのだけど、丁重ながらも断固たる口調で拒絶されてしまったよ。だから、彼と一緒に田舎家へ戻る道すがら、私は彼の翻意を促そうとした。私たちが帰宅すると、父が固辞したという事実がメアリアンに伝えられたが、私がどこの誰であるか分かると、彼女自身も自分を是非とも妻にしようとしている私を思いとどまらせようとした。そのことが彼女にどれほど苦痛を与えているのか、私にもよく分かったよ。

しかしながら、私は執拗に食い下がった。称号なんか私にとつては何の価値もないこと、今は完全に人目を避けて生活していること、メアリアンを失うなら絶対もう結婚はしない覚悟でいることなどを申し立てた結果、私は不承不承ながらも彼女から同意を得ることができた。それで、来るべき結婚のことを私の弟に知らせたのだが、彼の不満がいかほどのものであったかはすぐに分かったよ。とはいえ、弟が野心のあまり強硬手段に出てくるなんて想像もしていな

かった。結局、私たちの結婚の立会人は弟とメアリアンの父親だけで、結婚は極秘で行なわれることになったのだ。あの恐ろしい夜のことを君にどうやって説明したらいいだろうか？ 思いつくたびに体が震えるし、他人に話さねばならないなんて想像したこともないけど、できるだけ簡潔に話してみよう。

結婚式は肅然と執り行われた。私がメアリアンに花嫁らしいドレスを着るように主張していたので、一緒に王女様のように祭壇まで歩く姿を見た時は、思わずうっとり見とれてしまった。だけど、実際に結婚して幸せの絶頂に達したと思った、ちょうどそのとき私はこの上なく辛い悲哀を味わいそうになっていたのだ。というのは、弟が自分の野心にとって脅威となる危険をなんとかしても避けんがため、私に対して残酷な策略をめぐらし、それが成功してしまったのだからね。私の召使いの一人が——あとで彼女は計画のすべてを打ち明けてくれたのだけど——弟から袖の下をもらって説き伏せられ、結婚式当日の晩に花嫁を少し離れた所へ引っぱって行き、実は自分自身が妻であること、今回の結婚の話を聞かされた時に脅迫によって私から沈黙を強いられたこと、今度は自分が意趣返しとして秘密をばらすのだといったような、とんでもない嘘をでっち上げていたのだ。

弟はメアリアンの純真さを利用して陰謀を企てていたので、かわいそうに彼女は疑うこともなく、この恐ろしい話を本当だと思い、すぐ逃げ出してしまった。ほどなく私は彼女がいないことに気づき、夜を徹して探しまくった——が、それは徒勞に終わったよ。私は苦悶のあまり

翌日は物すごい熱病にうなされてしまった。人生に絶望してしまい、生きるのがいやになって、体の回復を望まなくなってしまうたのさ。とはいえ、まだ妻を取り戻す希望は捨てていなかった。それで、体力が回復するや、彼女の捜索に出かけたのだ。

捜索時の問い合わせは無駄足を踏むばかりだったので、絶望した私はあとに何を残していくことになるのか、これから将来どんな生活を送ることになるのか、そんなことはまったく構わずに故郷を離れた。これ以上は君に話す必要もなからう——その後はずっと地上をさすらう放浪者になったのだ。一ヶ月前にフランスへ戻ってくると、今では弟が私の称号と財産を保有しているという噂を耳にした——野望がかなって弟も嬉しいに違いない。君は私のことを気が狂っていると思うだろうね。他の人であれば、私みたいに無鉄砲なことはず、もつと賢明に行動していただろうから。多分そうだろう。私はいつも他の人とは違っていたからな——やり方が、それから、ありがたいことに、望むものがね。

* * * * *

ここで見知らぬ男は話をやめて腰を上げた。彼はもう一度小さな墓地を通り抜け、もう一度「お嬢さま」の墓石の前で立ち止まった。それから、溜息をつく、その場を立ち去ってしまった。それ以後もう二度と彼の噂を聞くことはなかった。

【訳注】

- (1) 眼下に広がるピレネー山脈の美観はギッシングのお気に入りだった。死ぬ直前にギッシングは保養のためにピレネー山脈の麓にあるフランス南西端の海辺の町サン・ジャン・ド・リュース(Sf. Jean-de-Luz)に行き、最後は健康によい気候を求めて同じ山麓にあるイスプール(Ispoure)へ移ったが、心筋炎(myocarditis)が原因で一九〇三年二月二十八日午後一時一五分に息を引き取った。
- (2) 西ローマ帝国滅亡からルネサンスの前まで、文化の発展が停滞したヨーロッパの中世は一般に「暗黒時代」と呼ばれる。
- (3) フランスの作家ラブレール(Francois Rabelais, 1494?-1553)は弁護士の末子として生まれ、修道士となつて哲学・神学を学びながらも古代文化への情熱を燃やし、中世の遺産を引き継いでルネサンスの散文学を開花させた。『ガルガンチュアとパンタグリユエルの物語』(*Gargantua et Pantagruel*, 1534-64)はフランス・ルネサンスの最盛期を代表する傑作である。
- (4) ジャン・フロワサル(Jean Froissart, 1337?-1405?)はフランスの年代記作家。一三三二年から一四〇〇年までの百年戦争前半部を扱った全四巻の『年代記』(*Chroniques*)は、十四世紀におけるイングランドとフランスにおける騎士道文化を記した傑作と評価されている。
- (5) シューテット(Choutete)は「キャベツ頭」の意。
- (6) 帽子のように被ったり、リボン・花・櫛などのように付ける頭の装飾品で、しばしば地位や職業を

示す。

(7) ヴィクトリア朝の服毒自殺の手段としては、医薬品としても使われ、殺鼠剤 (ratsbane) など身近で使用されていた砒素 (arsenic) が多かった。また、月経の際の鎮痛剤として阿片チンキ (laudanum) が幅広く処方されており、女性の自殺によく使用されていた。

(8) 「安らかに眠れ」の意。R.I.P. [*Requiescat in pace*]: May he [she] rest in peace!

(9) 「いけ好かない恋敵」の訳注(7)を参照のこと。

(10) 合切袋 (wallet) は旅人・巡礼・乞食などが細々した携帯品いっさいを入れるための口紐がついた布製の袋のこと。

(11) アルファベットを二文字またはそれ以上組み合わせで作った文字(通例、氏名の頭文字を組み合わせたものが多い)。